

## ■今月の特選句

2014年12月号

## 水面より串の林やおでん鍋

有富洋二

写生句である。伝統俳句専門俳人にはつくれぬ。串の林という表現は純真な心が無いと出来ない。「間伐のおでんの串の横並び」。

## 熱爛や顔じゅうの皺寄せ集め

菅野あたる

逆説的表現である。皺はマイナス表現だが、嬉しくて出来る皺を集めて、嬉しいをうまく表現。「晩酌の終わりに解かれ顔の皺」。

## 蛇穴に入り巻尺は釘箱に

原田 曄

そう言えば巻尺もとぐる巻いてるね。しかし、あきらかに別物だから離れている。だから可笑しい。「巻尺のとぐる巻きをり釘箱に」。

## 手焙に母の埋めし不発弾

小林英昭

母という存在に畏敬の念がある。少年時代の英昭君は、不発弾の爆発を恐れつつ悪事を重ねた。「お勉強火鉢の母の視野にゐて」。

## おほかたは無くてよき事神の留守

百千草

ひと月かけて、出雲で談合するような暇な神様に愛想尽かしたんだね。今必要な神様は、年金増額の神。「羨望す年に一度の神の旅」。

## いつ咲けど私の勝手彼岸花

稲沢進一

今年は彼岸花の咲くのが遅れた。異常気象の影響か。かつては死人花と嫌われたものだが、「結婚の適齢期なし彼岸花」。

## ■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

蛤となりて喰はれし雀かな  
・・・変身なんかしなきや良かった  
小川 鈍太

台風の進路予想図すぐ右折  
・・・台風さんの深情けとも  
加藤 賢

月仰ぐことを忘れて帰宅せり  
・・・それでも一句をつくる辣腕  
山本 賜

角切の鹿の方向音痴かな  
・・・方向指示器だつたか角は  
笠 政人

落葉並べて銀行屋さん幼子は  
・・・落葉は紙幣どんぐり小銭  
加藤澄子

恋敵の股を狙いし鉄砲百合  
・・・スポーツならば即時退場  
久我正明

長き夜や心のえんま帳を繰る  
・・・悪事の履歴何冊分に  
金澤 健

選択肢いくつもありて穴まどひ  
・・・普段からなり優柔不断  
工藤泰子

白息に覇気あるものとないものと  
・・・吐きと言うから白息は覇気  
下嶋四万歩

赤や黄よ落葉の上の雨粒は  
・・・俳人の目にや枯葉も美術  
高橋素子

**北窓を塞ぎ名句を弄ぶ**

・・・類句つくらぬようにしなさい

西をさむ

**貯めるより減らす気力の豊の秋**

・・・つまり脂肪の腹巻きのこと

柳 紅生

**ひとりなら卵をかけて今年米**

・・・卵ご飯もひとりも贅沢

井口夏子

## ■今月の滑稽句

- |      |   |                         |
|------|---|-------------------------|
| 【佳作】 | 農継がず子も孫も来て鎌祝い<br>新宿をうろつくヤング穴かい<br>誰よりも気どりやに付く草じらみ   | 青木輝子<br>青木輝子<br>青木輝子    |
| 【佳作】 | 北向かふ往還将に秋時雨<br>中折れの帽を阿弥陀に秋の道<br>霧積める木々の枝生す鹿の角       | 青山桂一<br>青山桂一<br>青山桂一    |
| 【佳作】 | 重塔を包むもみちとわが装い<br>秋冷の碁を打つ手元震えけり<br>深秋のキャピキャピ踊る娘無視したり | 秋月裕子<br>秋月裕子<br>秋月裕子    |
| 【佳作】 | 三日月の顎に輪投げのやうな雲<br>出女を今は咎めず箱根秋<br>鵝贄の賞味期限をチェックせず     | 麻生やよひ<br>麻生やよひ<br>麻生やよひ |
| 【佳作】 | 塀越えて落ち葉と猫の来たりけり<br>新品のもみじマークで紅葉狩り                   | 有富洋二<br>有富洋二            |
| 【佳作】 | 松茸の味も忘れてしまひけり<br>立ち読みの仲間入りする文化の日<br>菊人形姫も老女もまだ蕾     | 有吉堅二<br>有吉堅二<br>有吉堅二    |
| 【佳作】 | 柿盗人を数えて縄をなわず<br>ピンボケの無い我がカメラ冬景色<br>みかん成り過ぎて木が風に倒れる  | 粟倉健二<br>粟倉健二<br>粟倉健二    |
| 【佳作】 | 混み合へる十一月の鬼籍かな<br>高らかにラヂオ鳴らして冬野行く<br>家系には不美人揃ひ七五三    | 飯塚ひろし<br>飯塚ひろし<br>飯塚ひろし |
| 【佳作】 | 用無しの案山子あっさり捨てられる<br>粉ふくを待たず歯抜けの吊るし柿                 | 井口夏子<br>井口夏子            |
| 【佳作】 | パンツのボタンはじけて食慾の秋を知る<br>溪流の釣果がなぜか秋刀魚なり                | 池田亮二<br>池田亮二            |
| 【佳作】 | 寒卵真ん中命中ほくそ笑む<br>何もせず生きてるだけで暮早し                      | 石川セツコ<br>石川セツコ          |
| 【佳作】 | 筋書きは寺と柿屋の鐘が鳴る<br>柿三つ喰へば三つの蒂残る                       | 伊地知寛<br>伊地知寛            |

	爽やかや垣を外した混浴場	伊地知寛
【佳作】	とりあえずパブロン飲んでおく夜寒 水道代嵩む道楽菊作り マリア像にあがる賽銭螽斯	伊藤浩睦 伊藤浩睦 伊藤浩睦
【佳作】	山頂に小さき石仏秋深し 秋の空雲を遊ばせ風となる	稲沢進一 稲沢進一
【佳作】	栗御飯隣の碗を覗き見す 神の留守知るも知らぬも手を合はす 留守番の神に賽銭弾みけり	井野ひろみ 井野ひろみ 井野ひろみ
【佳作】	家蠅や無賃乗車の山手線 だまし絵を見る文化村栗御膳 友も毛も少なくなりし秋あわれ	入江澄泉 入江澄泉 入江澄泉
【佳作】	リゾートのプールで泳ぐただ一人 常夏の木々に囲まれガバジュース 台風とハイタッチしてグアム島へ	上山美穂 上山美穂 上山美穂
【佳作】	鳥渡る青信号のLED どの家も煙突のなきクリスマス 幻のイスラム国や憂国忌	氏家頼一 氏家頼一 氏家頼一
【佳作】	鴟猛る朝の空気をこわばらせ つぶやきの途絶えしままの霜夜かな 待ち針のごと葉のうらの越冬蝶	梅岡菊子 梅岡菊子 梅岡菊子
【佳作】	木の葉髪ぼつんぼつんもの忘れ 新聞のまづ死亡欄今朝の秋 家猫も芸に老いたる文化の日	越前春生 越前春生 越前春生
【佳作】	執念の一葉落ちし小春かな エリンギを松茸と云ひ子に食わせ	大澤酒仙奴 大澤酒仙奴
【佳作】	ベリーダンスに天の岩戸の凍て緩む 春を待つ私とミミズの代謝率 ドラえもん帰りたくなし日脚伸ば	大関のどか 大関のどか 大関のどか
【佳作】	枯蠓螂色気喰ひ意地衰えず 林檎にも歯の立たぬ身となりけり	小川鈍太 小川鈍太
	捨て団扇重き未練を残しゆく	奥脇弘久

【佳作】	秋あはれ首なきマネキン運び去る 蝸やその日暮しのひと日終え	奥脇弘久 奥脇弘久
	手に余る辞典の重み文化の日 秋さぶや瘦けたる頬をさすり上げ	笠 政人 笠 政人
【佳作】	芒原狐の面の落ちてゐる 飲み会女子会忘年会や共に古い	加藤澄子 加藤澄子
	冬瓜を貰うてくる顔浮かぶ ふと惜しむ気持よざれり木の葉髪	加藤 賢 加藤 賢
【佳作】	文字遊びへのへのもじの案山子かな 妻の留守浪曲唸る秋の雨 コスモスやしっかり立ってる通学路	門屋 定 門屋 定 門屋 定
【佳作】	秋澄むや誠心誠意嘘をつく 天高く犬も励むやダイエット	金澤 健 金澤 健
【佳作】	料理にも散るシルバーの木の葉髪 木の葉髪に縁なき尼の羨まし 秋思かなゴミ分別のぼけ防止	川島智子 川島智子 川島智子
【佳作】	栄養剤たよりの勤労感謝の日 ハロウインの仮面の世界より醒めし	菅野あたる 菅野あたる
【佳作】	深まりし二人の溝に落葉積む 草の花魔法を入れる魔法瓶	久我正明 久我正明
【佳作】	片づけの苦手な人に穴まどひ 光去り薫始まる式部の実	工藤泰子 工藤泰子
【佳作】	対トンボ婚活中の輪の中に 冬が好き転勤辞令南国へ	黒田忠一 黒田忠一
【佳作】	惚れられた思い過ごしか又くしゃみ ぎっくり腰くしゃみするのも命がけ レントゲンの吾が骨あわれ枯木立	小泉花子 小泉花子 小泉花子
【佳作】	腹の虫起こして罪な夜鳴蕎麦 マドンナのものと思へぬくさめされ	小林英昭 小林英昭
【佳作】	立ちて携帯座れば携帯日の暮るる 七五三祝いて捻る五七五	酒井鹿洋 酒井鹿洋

	芋洗う大東京を脱出す	酒井鹿洋
【佳作】	渋柿を食した三つ子の魂 三才児パソコン片手おやつ食べ 親子してスマホンいじり会話なし	佐藤義子 佐藤義子 佐藤義子
【佳作】	そぞろ寒佳作どまりの俳句にて 北海道夏日の次に雪降ると 紅葉の蔵王ロープウェイ樹氷駅	佐野萬里子 佐野萬里子 佐野萬里子
【佳作】	長き夜や目覚しベルを待ちきれず 未練なき人にも付きし薺虱	下嶋四万歩 下嶋四万歩
【佳作】	茸狩り仰山採るもちと怖し 初物の焼き松茸に手の震へ 柿熟るやあらかた鳥に分捕られ	壽命秀次 壽命秀次 壽命秀次
【佳作】	文明と文化の違い文化の日 怒り肩なで肩猫背案山子立つ 運不運向かう側より木の実降る	白井道義 白井道義 白井道義
【佳作】	その他大勢の中は暖かった カゼ予防注射は冬を加速する 紋白蝶に肩叩かれて白菜になる	鈴木和枝 鈴木和枝 鈴木和枝
【佳作】	テーブルで参考書読む秋の暮 秋の風イワシテンプラしょう油かけ 冬帽子スニーカー履きコンビニへ	鈴木哲也 鈴木哲也 鈴木哲也
【佳作】	狐火や一服吸って帰ろうか 神無月宮司祈禱や詣で客 無医村に無住寺も有り玉子酒	高田敏男 高田敏男 高田敏男
【佳作】	全員がスマホ見ている菊日和 肝抜かれますますスリム秋刀魚かな 善女なればこの木登れぬ夕紅葉	高橋きのこ 高橋きのこ 高橋きのこ
【佳作】	咳込めば周りはマスクの人ばかり 出稼ぎの蚊の移住など許されず	高橋素子 高橋素子
【佳作】	尾道の秋の海の色忘れず ひやとひの通天閣を登高す ひたひのぎよくをおぼえたるよながかな	田中 勇 田中 勇 田中 勇

【佳作】	精も根も尽きし案山子やモンスター(台風) 謳歌過ぎよろよろ蠮螋犬走り 神在月誓ひの言葉交し合ふ	田中早苗 田中早苗 田中早苗
【佳作】	レモンしぼる金と力の無き俺が 秋寂ぶや二階に上がり用忘る 不器用はいつも不器用障子貼る	田村米生 田村米生 田村米生
【佳作】	七五三着物のすそはスニーカー 蒸かし芋昔主食で今グルメ 井の鰻の幅が狭くなり	津田このみ 津田このみ 津田このみ
【佳作】	語気強しぐさりグサリとそぞろ寒 秋晴れや採点倦みてモーツァルト 湯豆腐の湯気もあもあと夕餉かな	土屋泰山 土屋泰山 土屋泰山
【佳作】	寝違えて上から目線の懐手 偕老や股引亭主の物ならず お茶漬けもおつまみも居る土俵上	都吐夢 都吐夢 都吐夢
【佳作】	励ましの言葉にはげし木の葉髪 寄鍋に余生の今を迷ひ箸 くつさめに漢字の嚏とびちりて	永島董玉 永島董玉 永島董玉
【佳作】	菊人形袖の下より乱れそむ 身をよぢり真赤に怒る唐辛子 傷物が傷物を買ふ林檎市	新島里子 新島里子 新島里子
【佳作】	狐火の飛んで火に入るノーベル賞 八木健も走る道後の師走かな	西をさむ 西をさむ
【佳作】	汗ばみてビール片手の初冬かな よき昭和終焉教える葛湯かな 目の前のスワンの雛見て禁煙し	花岡直樹 花岡直樹 花岡直樹
【佳作】	鞭打ちのけさは激しき干蒲団 神迎子のタミフルが効いてきた	原田 曄 原田 曄
【佳作】	生身魂一人芝居の技磨く 師の影の三步先ゆく新入生 食べ過ぎて飛べぬ鴟や翹雲	ひがし愛 ひがし愛 ひがし愛
【佳作】	賄賂なら下仁田葱も貰ふまじ 木枯しや足だけ残る屋台酒	久松久子 久松久子



【佳作】	厄落しもせず恙なき余生かな	久松久子
	コメンテーターペラペラ喋り文化の日	日根野聖子
【佳作】	泥つきの大根一本お持ちなよ 時雨るるや演歌を歌つてみたくなり	日根野聖子 日根野聖子
【佳作】	定位置を得られぬままに捨団扇 同類と肌が合わない穴まどい ゆるキャラの暴れ捲るも文化の日	広瀬雅幸 広瀬雅幸 広瀬雅幸
【佳作】	天へとどく膨るる夢の干布団 小春風異国の瓶の漂はず 恵美須舞鯛焼を食ひ紙の鯛	藤岡蒼樹 藤岡蒼樹 藤岡蒼樹
【佳作】	日向ぼこつかれた人がやつてくる 日向ぼこポイントあれば溜まつてる 猫にやる花がつを持ち日向ぼこ	藤森荘吉 藤森荘吉 藤森荘吉
【佳作】	萩散らす無情の雨となりにけり 運動会鳥獣戯画のけものたち 木枯と解散風の揃ひ踏み	藤原セツ子 藤原セツ子 藤原セツ子
【佳作】	松茸や何処の産地も拘わらず 空っ風女性の地位を吹き飛ばす 身に染みる自業自得の女性地位	細川岩男 細川岩男 細川岩男
【佳作】	女の背より草じらみ取る警察官 小春日や老人鳩にいなされて 鎌鼬(いたち)うろついてゐる無人駅	松井まさし 松井まさし 松井まさし
【佳作】	脇甘い看板大臣(おとど)に秋の風 霧の海行方の見えぬTPP 滑稽の極みは遥か年果つる	丸山紘一 丸山紘一 丸山紘一
【佳作】	肩車妻にもしてよススキ原 いじめてる目高をすくひ諭したし アンパンマン並んでくつろぐ秋日なか	三橋百笑 三橋百笑 三橋百笑
【佳作】	忘れたきこと忘れ得ず年詰まる づかづかと礼なき師走来たりけり 三角はどこも頂点冬至来る	宮森 輝 宮森 輝 宮森 輝
【佳作】	ビル越えて砂丘を超えて神の旅 雉の一声里山一の歌舞伎者	百千草 百千草

- |      |  |                         |
|------|--|-------------------------|
| 【佳作】 | 財布など持たぬ男の懐手<br>パレードの気分させる大銀杏<br>今日も新しい落葉を掃いている         | 森岡香代子<br>森岡香代子<br>森岡香代子 |
|      | 失恋で夜なが羊が止め処なく<br>滑稽や八十一歳十か月                            | 森 要<br>森 要              |
| 【佳作】 | 正月を立冬歳暮が呼びに行く  | 森 要                     |
| 【佳作】 | 千歳飴これが虫歯のきつかけに<br>山々は寝入りばなかと思はるる<br>焚火てふ風習今や燃え尽きし      | 八木 健<br>八木 健<br>八木 健    |
| 【佳作】 | マスク顔医者も患者も看護師も<br>かいつぶり岸边に近くかいくぐり<br>三行半四畳半にや隙間風       | 八洲忙閑<br>八洲忙閑<br>八洲忙閑    |
| 【佳作】 | 尻に火の着く用起こり落葉焚<br>大見得に力水つけ菊人形                           | 柳 紅生<br>柳 紅生            |
| 【佳作】 | 「みやげ」にと紀州の梅干シワ婆に<br>大根足加重の膝はボーロボロ<br>口づさむ山栗貰う里の秋       | 柳澤京子<br>柳澤京子<br>柳澤京子    |
| 【佳作】 | 名月の食され朱き盆となり<br>山寺や味噌炒めさる皮通草<br>みちのくのりんごさくりと歯応えす       | 山下正純<br>山下正純<br>山下正純    |
| 【佳作】 | 塀越しの幼稚園児の秋の歌<br>おやつなりかつて主食のさつま芋<br>胡蝶蘭しまひの一花に声かける      | 山本けい子<br>山本けい子<br>山本けい子 |
| 【佳作】 | コスモスや日本中のバスが来た<br>地下鉄の風にたじろぐ今朝の冬                       | 山本 賜<br>山本 賜            |
| 【佳作】 | 村捨てし子らに代りて熊のくる<br>市となれば嫁のくるかも木の実降る<br>やんちやの子しずめて禰宜や七五三 | 横山喜三郎<br>横山喜三郎<br>横山喜三郎 |